

起業家精神を支えるもの

千本 倅生 (イー・アクセス株式会社代表取締役社長)

筆者は1984年、20年余勤めたNTTを飛び出して第二電電(現KDDI)を共同創業した。同社を日本第二位の通信会社にまで成長させ株式公開まで実現させた後、今度は副社長の地位を投げ捨て、慶應義塾大学経営大学院の教授へと転身した。そして、インターネットの革命的な威力があからさまになり、ブロードバンド・インフラの整備が社会的使命となった1999年、今度は教授職を投げうって通信ベンチャー企業を創業、再びビジネスの世界へと活動の場を移した。

その度に筆者は多くの人から「もったいない」という言葉を聞かされた。この言葉の根底にあるのは、「大きいものが強い」、「大きくて古い(伝統がある)ほうが安心」という日本人のマインドセットである。このマインドセットを反映して、日本では起業家を支援する環境も文化も育ってこなかった。日本は起業家にとって難しい国であったと言える。

一方、米国経済の1990年代の持続的成長を支えたのは、シリコンバレーに代表される様に新しいベンチャーが次々と生まれて育ち、古くなったシステムを新しいシステムが置き換えていくメカニズムであった。このようなメカニズムを取り入れて社会の新陳代謝を進めない限り、日本経済の再生など到底覚束無い。

今に問われているのは、日本人一人ひとりの心に根を張っている「新しくて小さいものは必ず古くて巨大なものに負ける」というマインドセットを壊せるかどうかである。新しいもの、チャレンジ精神旺盛でエネルギッシュなものほど素晴らしい、応援しようという方向に日本人の意識は変わっていかなければならない。

	千本 倅生 プロファイル
<ul style="list-style-type: none"> ● 京都大学工学部電子工学科卒業 ● フルプライト交換留学生としてフロリダ大学修士課程・博士課程修了、工学博士(電子工学) ● 日本電信電話公社(現NTT)入社、1983年 近畿電気通信局技術調査部長 ● 1984年 第二電電(DDI)共同創業、1994年 同社副社長 ベンチャー企業のDDIは日本第二位の通信会社KDDIに成長 ● 1996年 慶應義塾大学経営大学院教授に転身、専門はベンチャー企業論およびIT産業経営論 ● 1999年 イー・アクセス株式会社(eAccess)創業。代表取締役社長(現任) ● 2000年 世界経済フォーラム(ダボス会議)パネリスト&分科会司会者 ● 2000年 九州・沖縄サミット開催記念イベント <ul style="list-style-type: none"> - 世界経済シンポジウム(大蔵省財務総合政策研究所等)パネリスト - インターネット国際会議(東京財団)メンバー - デジタル・オポチュニティへの福音(世界経済フォーラム)メンバー ● 2001年 世界経済フォーラム(ダボス会議)パネリスト&テーブルホスト ● 2001年 カリフォルニア大学バークレー校経営大学院客員教授 	
Copyright©2009-2011 eAccess Ltd. All rights reserved.	

	人生における3度のチャンス
それぞれの転機で考えたこと	
<ol style="list-style-type: none"> 1. NTTを飛び出して第二電電を創業した時 2. DDI副社長を辞め、慶應経営大学院の教授となった時 3. 教授職を捨て、イー・アクセスを創業した時 	
Copyright©2009-2011 eAccess Ltd. All rights reserved.	

eAccess Member Access
Entrepreneur Access **これまで日本の反ベンチャー的風土**

ベンチャー精神を損ないがちな日本

- 日本の文化・価値観
 - “新しいこと” “人と違ったこと” “チャレンジすること”を尊ばない
 - 他者の成功への嫉妬
 - 自己責任に欠け、依存的
- 失敗が許されない
- 大企業依存意識、母親の安定願望
- 人材の流動性が低い
 - 日本の長期雇用慣行に沿った賃金制度
- 資金調達市場の未成熟
- 少ないVCの支援

 **日本は起業家にとっては難しい国であった**

Copyright © 2000-2001 eAccess Ltd. All rights reserved.

eAccess Member Access
Entrepreneur Access **米国のベンチャーを支えるもの**

社会的価値、文化

- 「新しい」「ユニーク」「チャレンジ」を尊ぶ
- 身近に多くの成功者。他人の成功を喜ぶ
- 自己責任の確立

激変する社会環境

- 若者（ビジョン） > 長老（経験）

失敗の許容

- 敗者復活可能、有限責任、失敗≠全財産・全人生喪失

ベンチャー育成のインフラ

- 人材の流動性
- VC、コンサルタント、会計/法律事務所、大学、等

Copyright © 2000-2001 eAccess Ltd. All rights reserved.

eAccess Member Access
Entrepreneur Access **日本のベンチャー環境の変化の芽**

価値観の変化

- 大型倒産による大企業の安定性への疑問
- やりがい意識の変革

社会経済の変化

- IT & ブロードバンドによるSMEのビジネスチャンス増加
- 社会変化の早さに対応する動きの速い組織が必要となる

人材供給面の変化

- 終身雇用制の崩壊
- ビジネススクールの増加

資金供給面の変化

- 海外VCの進出と国内VCの成長
- 新株市場の創設

その他の変化

Copyright © 2000-2001 eAccess Ltd. All rights reserved.

eAccess Member Access
Entrepreneur Access **日本のベンチャービジネスの現状**

人材・労働市場

- 依存傾向は薄れるも、根強い大企業志向は存在
- 労働市場の流動性の高まりは見られる

資金調達環境

- ネットバブルの崩壊で投資意欲は急激に減退
- 新興市場の公開価格が公開前の増資価格を下回る例が相次ぎ、投資会社は選別を強めている

EXIT環境

- 新興3市場で計983社上場（8月18日時点）
 ジャスダック 893社 マザーズ 34社 ナスダックJ 56社
- 新興3市場の新規上場数は高水準継続（今年1月～6月で51社）
- IT系企業の上場ブームは一段落も、幅広い業種で公開意欲向上

ビジネスモデル

- IT革命・ブロードバンド革命により、あらゆる産業においてスモールビジネスおよびニュービジネスの可能性は拡大

Copyright © 2000-2001 eAccess Ltd. All rights reserved.

eAccess Member Access
Entrepreneur Access **起業環境への認識**

起業は甘いものではないという覚悟は必要

- Easy Moneyにより、成功に対する義務感や失敗に対する恐怖感が無くなることは問題
- 起業への情熱を抱いて苦勞した者だけが報われる

社会変化により起業は確実に活性化される

- 現在の起業活性化は、ITによる知識社会化などの大きな社会的環境変化がもたらしている
- 従って（波はあっても）一時的ブームということにはならない

ベンチャーに対する支援の一層の向上が望まれる

- ベンチャー企業を育成するという社会的流れは生まれている
- これを発展させ現実なものとするため、社会的にも政策的にもベンチャーを積極的に支援し、新陳代謝を進めて日本社会を活性化することが必要である

投資家は資金提供のみでなく経営支援を

- しっかりとした業務精査を行い黒字への道筋を導くことを、投資家が積極的に行うべきである

Copyright © 2000-2001 eAccess Ltd. All rights reserved.

eAccess Member Access
Entrepreneur Access **起業家が経営者となっていく時に必要とされること**

SPEED

- 小さく動きが速く強烈に伸びる経営構造をとる
- 伝統的な階層構造の重い企業形態の足かせを取り除く

AMBITION

- ビジョンを明らかにして、目的と価値を共有する
- 高い企業倫理を持つ

FLEXIBILITY

- 変化を恐れずに、変化を推進する
- 環境変化を的確に捉えて、戦略を策定する

EXECUTION

- 経営に王道はないので、きっちり経営学を身に付ける
- 優れた経営チーム組織化、明確な事業計画を遂行する

Copyright © 2000-2001 eAccess Ltd. All rights reserved.